

離見の見（りけんのけん）

能の大成者として知られる世阿弥は、数々の珠玉（しゅぎょく）の言葉を後世に残しています。世阿弥の有名な言葉の一つとして、「初心忘るべからず」があります。これは、初めの志を忘れてはならないという意味だけではなく、新しい事態に直面した時の対処方法、すなわち試練を乗り越えていくときの考え方を意味しています。

また、世阿弥は、「花鏡（かきょう）」の中で、「観客を見る役者の演技は、離見（客観的に見られた自分の姿）である。『離見を自分自身で見る』すなわち【離見の見（りけんのけん）】が必要であり、自分を見る目と観客を見る目を一致することが重要である」と述べています。

さらに世阿弥は、＜目前心後（もくぜんしんご）＞という言葉も用いています。これは「眼は前を見ていても、心は後ろに置いておけ」ということ、すなわち、自分を客観的に外から見る努力の大切さを指摘しています。これと似た言葉で「木を見て森を見ず…」という言葉もありますが、私たちは、部分から全体を見るだけではなく、大局(全体)から小局(部分)を見る視点も身に付ける必要があると思います。

すべての教師は、子どもたちのために日々努力を惜しまずに職務にあたっています。そして教師としての経験やスキルを身に付けるほどに、子どもへの理解を深めることができているかもしれません。しかし、一方では過度な自信と慢心に陥らないように自らを戒めることも大切です。

一人一人の子どもたちのために良かれと思ってやっていることが、いつの間にか子どもや保護者の願いからずれてしまっていないかどうかを、大局的かつ客観的に振り返るために、自分自身の姿を【離見の見（りけんのけん）】で見定める心のゆとりを持ち続けたいものです。

そのためには、謙虚に子どもや保護者の声に耳を傾けること、同僚や先輩教員を含めた第三者の助言や意見を進んで聴く努力が必要です。子どもの小さなつぶやきや心の声を聴き取ろうとする営みは、教師である以上求められ続けるのです。こうすることで子どもや保護者の視点に立って教師としての自分を見つめ直すことができるのかもしれません。

常に成長し続けられる教師であるために、第三者の目で客観的に今の自分を見つめ直し、足りないところを補っていくことを大切にしたいと思います。